



東日本大震災から10年
～あのとき起きたこと、これから～

＜10年誌について＞

東日本大震災から10年という節目を迎え、当時の支援者や、避難された方に、発災後や10年間の想いなどを寄稿いただき、震災に関するそれぞれの想いを、我々が、忘れることなく、後世に伝えるために作成いたしました。

もくじ

あいさつ 岡崎市長 P 1

寄稿（避難された方）

被災地から岡崎市に避難された方 Aさん . . . P 2～5
被災地から岡崎市に避難された方 Bさん . . . P 6～7
被災地から岡崎市に避難された方 Cさん . . . P 8～9

寄稿（岡崎市職員）

岡崎消防職員 A P10～12
コラム「緊急消防援助隊」 P13
岡崎消防職員 B P14～15
市民病院職員 A P16～17
市民病院職員 B P18～19
コラム「DMAT」 P19
保健部職員 A P20～21
保健部職員 B P22～23
ボランティア担当職員 A P24～25

あいさつ

令和3年3月11日、甚大な被害の爪痕を残した東日本大震災から10年の節目を迎えました。

被災された皆様に心からお見舞い申し上げるとともに、今なお、復興に向けてご尽力されている多くの皆様に深く敬意を表します。

震災後、緊急消防援助隊や罹災証明の発行、応急給水活動や復興支援事務といった災害対応業務を支援するため、本市も延べ300名以上の職員を派遣し、被災地の早期復旧・復興にお力添えをさせていただきました。

平成29年1月には、支援先であった宮城県亘理町と災害時の相互支援に関する協定を締結し、平成30年の「岡崎城下家康公秋まつり・商工フェア」では、まちの名物「はらこめし」を販売していただくなど、支援を縁として交流を深める活動を続けており、こうした取り組みは、他自治体へも広がりを見せています。

本市は、南海トラフ地震防災対策推進地域に指定されており、東日本大震災に匹敵する「国難」クラスの災害発生が懸念されています。今後も被災地での経験を踏まえ、被災された皆様方の声を頼りに、真摯に防災対策に取り組み、被害を軽減する施策につなげていきたいと考えております。

最後に、本誌の発行に当たりご寄稿いただきました皆様に、心から感謝申し上げます。

岡崎市長 中根 康浩

被災地から 岡崎市に避難された方 A さん

震災直後の記憶

2011年3月11日当時は、私立高校の教員でした。中学生の高校入試(1次)も終わり、来年度に向けての準備に取りかかっている時期でしたので、会議が多く行われていました。

14時46分は15人前後で会議中でした。

前日も震度4程度の揺れがあったばかりでしたので、最初は「また来たな」と思っただけでしたが、「がくん」と床ごと下に落ちた感覚があり、その後の揺れは、かなり激しく「ちょっとまずいな」と思い、とりあえず机の下に身を潜めてみました。しかし、いろいろ考えをめぐらせる余裕があるほど揺れている時間が長かったため、「穴も開いてないのに床下から風が吹いてくる(上昇気流が起こっている)」「地球のうなり声(地響き)が聞こえる」「あの重たいブラウン管テレビが揺れと自らの重力の反動で落ちた」等周囲を観察することができました。そして、不謹慎にもこの巨大な地球のエネルギー放出に感動してしまい、「地球ってすごい！」などと地震との遭遇を満喫してしまいました。

揺れがおさまり、校舎の外へ避難しながら、会議は四階建ての二階部分で行われていたので、「つぶれなくてよかったな。耐震工事(窓外枠に梁)は大切だな。」などと考えていました。校庭は揺れが来るたび、地割れを起こし、校舎の窓は液体物のように波打っていました。

校庭にいた部活動中の生徒にはパニックになっている者もいました。2

当日は午前4限で授業は終わり、ほとんどの生徒は学校には残っていませんでしたが、電車通学の生徒などは電車が不通となり、帰宅困難者となりました。福島駅と学校の間で立ち往生しているクラスの生徒6名を自家用車で拾って、私の自宅まで連れ帰りました。保護者が深夜にかけて迎えに来る者もいましたし、一夜を過ごさせた者もいました(途中の4号線が土砂崩れや橋の不通などで、主要道路は大混雑でした)。

私の家族は皆、自宅から半径5キロの職場や学校でしたので、夫は自力で帰宅し、娘は迎えに行くことができ、夕方には全員自宅に揃いました。その後はテレビなどで地震の状況を確認しましたが、徐々に伝えられる内容は東京の帰宅困難者のことばかりとなったので、見るのをやめました。

この10年間の記憶

普段から、もしもの備えはしているほうでした。私は愛知県出身だからなのか、いつか来る東海地震のためなのか、小さい頃から小学校や中学校での避難訓練や防災教育を、たぶん福島県の子どもたちより多く受けていました。よって水や食べ物のストックは多くあり、水道がストップしても、高校生を1泊させても、あまり困ることはありませんでした。当時はあまり浸透していなかったローリングストックができていました。また公園などの避難場所や非常時の給水施設なども把握していました。現在もその意識は継続しています。

しかし、原子力についての危険性は全く無知でした。教科書で高校生のときに学んだ「核融合」や「核分裂」など一生物学返すこともないと思っ

ていましたし、そのような単語自体を口にするつもりもないであろうと思っていた人生が一転しました。原発のメカニズムからの学び直しでした。私たち家族が福島を捨てて愛知県に自主避難した理由は原発事故発生なので、事故が何故発生してしまったのか、人体に対する影響はどうか、避難は妥当であったのか。今でも考えながら生活しています。

もともと、自然に沿った生き方をする、地球という船に我々人類は間借りして共生しているという考えはありましたので、人工物（化学物質や工業製品など）はあまり好きではありませんでしたが、原発事故後からは、人類と地球上に生活するすべての生き物との共存について深く考えるようになりました。今ある資源を大切に生活する、プラスチック製品を一度購入したら長く使うなど、地球に負担になることはなるべくやめようという気持ちや、化学物質が人体や自然環境へ与える影響について知りたいと思う気持ちが10年前よりは強くなったかもしれません。世の中にあふれているモノについて、どこから来てどこに行くのかをよく考えるようになりました。

これから

世の中が脱炭素社会に舵取りを始めていることは、良いことだと思います。しかし、それには原子力が必要だという方向に舵が取られてしまうと、福島の事故は何も教訓を残せなくて終わってしまいます。皆が共存し、かつ未来の子どもたちに、「真の未来」が残せるようにするためにはどうしたら良いのかと考えていかなければなりません。

コロナ禍中の社会の分断や格差など、現在進行中のさまざまな違和感が、まさしく震災後にしばらく感じた違和感と同一です。もしかしたらこの違和感の同一性は福島県に当時生活していた者にしかわからないかもしれませんが。未曾有の事態はこれからも起こることでしょう。そのときどのように生活すればよいのか、同じことを繰り返さないように常に謙虚に学ぶ気持ちと他者を思う気持ちを忘れないように生活していきたいと思います。

被災地から 岡崎市に避難された方 Bさん

震災直後の記憶

福島県いわき市にある自宅から2キロ離れた公民館で勤務中に被災しました。事務所にあった書庫が倒れ、その隙間から館外に避難しました。公民館は、避難所としての準備は全くなく、親子連れや女子高校生が避難してきても受け入れることができず、残念ながら小学校に案内する事しかできませんでした。帰宅後は、まず家族の命を守ることに徹しました。余震が続く中、原発事故の報道と友人が首都圏に避難したメールに心も揺れましたが、平常心を保ちながら、情報収集し夫と共に子どもの命を守ることを第一に考え、私の実家のある岡崎市に避難することにしました。避難せず、自宅避難を選択した親戚や隣人に額田の湧き水を詰めたペットボトルや日持ちのする食料を送りました。

この10年間の記憶

原発事故の影響を考慮し、福島の親子を岡崎市に毎年春休みと夏休みに招待しました。自然体験やスポーツ交流をする「福島のみんな！あそびにおいでんプロジェクト」を通じ、福島県いわき市と岡崎市の様々な世代で交流する機会を設けました。あの震災を風化させないために、そして岡崎市民の防災意識を高めるためにも、多くの方を巻き込んで実施しました。講演会で被災体験をお話する機会もいただき、今後起きうる震災に向けて、小さな命を守るために「守ろう子どもと赤ちゃん」として、母親向けに防災講座を開催しています。今でも変わらず、福島の自宅と岡崎の実家には、お米、飲料水、味噌を備蓄しています。また、2020年つながる場として「みんなのおうち連尺」を開設し、日頃から地域で助け合えるネットワークを構築しています。

これから

南海トラフ地震のような広範囲で被災した場合、岡崎市には救助が届かないと予想しています。その場合、福島県いわき市に住む、これまでの交流からつながりができた人々が救助してくれると確信しています。33万人の中核都市です。親睦都市として、締結できればより強い絆になると考えています。また、転入してきた子育て世代は地縁がなく日頃から大変な思いをしています。これからも転入した子育て世代に向け交流する場を設け、SOSを出せるゆるやかなつながりを構築します。

被災地から 岡崎市に避難された方 Cさん

震災直後の記憶

私は妻と3歳の長男、1歳の長女と福島県いわき市に住んでいました。地震と津波で近所も大きな被害が出ていました。初日の晩は余りにも余震が多いために自宅で寝ることができずに、隣の老夫婦の敷地に車を移動し休ませてもらいました。

翌日以降、水や食品・ガソリン等物資が不足して不便を感じてきましたがそれ以上に、日を迫うごとに原子力災害の影響が大きくなってきました。

私の自宅は原発から30km以上離れていたために当初は問題ないかと思っていました。

しかし近くの避難所では原発から近い町村からの避難者がやってきて、翌日にはさらに遠くへ避難して行きました。また、飲み水の確保のために出かけた中学校では外に出るなどと言われるし、市の広報車が屋内退避してくださいと言っていました。

どこまで被害が広がるか分からない上に、放射能の子供への影響を考え、私の職場が一時休止になったことを機に、妻の実家のある愛知県に身を寄せることにしました。福島空港からの臨時便を夜通し待って避難できました。確か地震から6日後だったと記憶しています。

ただし愛知への一時避難を決定する過程では故郷に留まりたい私と、子供のことと考えてすぐにできるだけ遠くへ避難したい妻との間では意見の相違があり、言い争いになりました。今でも時々妻からこの話を切り出されるほど当時は切羽詰まっていたと思います。

私の職場が再開した後も一時避難を続け、一旦3月末で妻子を愛知に残して私だけは福島へ戻りました。そこからしばらくは2重生活を続けた後に、私の転職先が決まったため1年後に再び家族そろって愛知で暮らすことになりました。

この10年間の記憶

毎年、日本のどこかで人命に関わる自然災害が発生しています。愛知県は住みよい場所と感じています。しかし予想できない災害がいつ発生してもおかしくないと思います。東日本大震災の発生地がここから遠いし10年も経過したため、他人事と思われる方も多いでしょうが明日は我が身です。

東日本大震災では1万数千人が亡くなっています。犠牲者のことを想うと命を粗末にはならないし、私自身後悔のないように生きようという心構えをしています。

私個人の内面での変化では、特に津波の被害現場を見てから、シンプルな生活を心がけるようになりました。心が安定していれば物が少なくてもなんとかなると思います。

避難の経験から申し上げますと、情報の受け取り方に気を付けるようになりました。当時の原子力災害の緊急時の政府の対応について、私は初め、政府の言うことだから大丈夫だと理解していたことが間違いだと後に気づきました。大切なことは、無数にある情報から自分がどう判断し、決断することだと思います。

愛知に避難して不安なことも多々ありました。半面、避難者登録をしたことで避難者同志やボランティアの多くの方々となりができて、行政からもサポートをいただき心の支えになっていることに感謝しております。

これから

限られた人生なので好きなことをすることは大切です。好きな自然の中での仕事をさせていただいております。自然に関する趣味もあるので一生追及していきたいです。

非常時のために野菜づくりも無理のない範囲で行いたいです。福島県では放射線量が低下したために立入・居住の規制はほぼ解除はされていますし、そもそも私の住んでいた場所に規制はかかりませんが、安心して子育てするために愛知に来たので、子供が成人するまではここでがんばりたいです。

岡崎消防職員 A

震災直後の記憶

東北地方太平洋沖地震、いわゆる東日本大震災から10年が経過した。

当時のことは今でもはっきりと記憶に残っている。私はこの日、勤務日で震災直後は中高層建築物調査を行うため、救助工作車で市街へ出向していた。震災直後、緊急無線で至急消防本部に戻るよう指示があり、消防本部に戻った。

東北地方で大規模な地震が発生したと報じるテレビを見ながら情報収集を行い、国、県からの緊急消防援助隊の準備情報に備え、各署所に対して緊急援助隊登録車両に関する部隊編成と出動部隊人員の様式を整えるよう依頼した。

緊急消防援助隊の派遣要請が入ったのは、部隊及び人員が概ね整理できた時であった。

数時間後には、消火部隊、救急部隊、後方支援部隊の3隊12名を集結場所に送り出し、その後間もなく指揮隊を愛知県隊の指揮代行として送り出した。あっという間に本市消防力は劣勢を極めながら、日常的な災害対応を強いられることとなったが、被災地はもっと過酷な状況であることは言うまでもない。その後、初動対応、現地からの情報収集及び次隊の編成等を任務として5次部隊までを消防本部で見送ったが、生存者の救助救出に関する情報は少なかった。7次隊として現地に出向し、行方不明者の捜索に着手したが、在宅避難者の生活もライフラインは完全に断たれていた。

この10年間の記憶

東日本大震災での経験は、その後の体制強化に大きく影響したと感じている。

阪神淡路大震災では、家屋、ビルの倒壊や火災による死傷者が多数発生し、各消防本部では瓦礫救助に関する資機材の確保や教養訓練が進められたが、東日本大震災では、津波による被害が圧倒的に多く、家屋に道路のアスファルトが突き刺さる、船がビルの屋上に乗っている、また道路閉塞による活動制限など、通常ではあり得ない光景を目にすることとなった。

当時、現地調整本部での会議の中で、町長をはじめ、国土交通省、自衛隊、警察、消防及び消防団等での話し合いが繰り返され、受援体制の重要性を改めて強く感じた。どの部隊がどこを拠点とし、何を共通の通信ツールとしているのかなど、不安定な要素が多かったことから、まずは消防としての受援体制の構築を目指した。

市部局の防災担当への異動を契機に、市としての防災対策について深く関わることになり、全市的な対応を各協定事業者と調整を図りながら明確に役割を位置づける仕事に着手した。また受援のためのフリースペースの割り振りに加えて、現地で活動制限を余儀なくされた緊急輸送道路や優先的に啓開しなければならない道路の指定を県や各担当部局と協議を進め、ライフラインの早期復旧を視野に入れながら地域防災計画に位置付ける取り組みをした。

全市的な対応の中で、消防という役割を最大限に発揮できるようにするためには部局間調整と情報共有ツールの構築が必要不可欠であると感じた。

これから

消防としては、常の業務が災害対応としていることや東日本大震災以後にも出向している緊急消防援助隊での活動経験が、発災時にも生かされると推測できるが、全市的には部局間の連携強化が課題と考える。

南海トラフ地震の発生が危惧される中で、市の対策として完成されていない部分を各部局が普段の業務の一端として位置付ける必要がある。

発災直後の対応として、保健所、福祉施設、学校及び保育など、必要な物品の洗い出しや備蓄方法などを具現化していくことが、被害の軽減に繋がるのではないかとと思う。

また、今後の災害対応を円滑にするために市の関係部局、市民病院（災害拠点病院）、自衛隊、警察、消防及び消防団等を活動拠点に集結させ、役割を再確認する大規模な受援訓練を実施する計画を推進していくことを望んでいる。

コラム「緊急消防援助隊」

平成7年1月17日に発生した、阪神・淡路大震災を教訓に、全国の消防機関による応援を速やかに実施するため、同年6月に創設され、令和2年4月現在で、全国の消防本部から、指揮隊、消火部隊、救助部隊、救急部隊、航空部隊など6,441隊が登録されている。

東日本大震災において、岡崎消防は愛知県隊として、1次隊を3月11日から派遣し、4月24日までに、のべ170人を被災地へ派遣した。



写真：緊急消防援助隊第1次隊出発式

岡崎消防職員 B

震災直後の記憶

消防署執務室にて事務をしている最中に大きな横揺れを感じ、国・県からの情報収集を行った。緊急消防援助隊の派遣要請が入り、なんとか隊を送り出し安心したのも束の間、みるみるうちに派遣要請の規模が拡大され、自身も3次隊員として過去に訓練・経験した事のない非日常下で災害対応にあたった。

名古屋市消防局の隊員と合同チームを組み指揮隊の任務に就いた。活動の最中に何度か大きな余震に見舞われ部隊を常磐自動車道まで退避させた。福島第一原発で爆発が起きたという情報は一度だけ耳にしたが現地では真偽すら分からず、内容を知ったのは帰岡後の放射線検査の時

この10年間の記憶

助けを待つ人がどこに居るのかすら分からない状況では、いかに効率良く被災地に援助隊を展開していくことが大切かを学んだ。

最近では自衛隊、警察、消防、DMAT等々組織の枠組みを越えて横の連携を強化する訓練が、全国・地方と積極的に実施されるようになったこと、捜索済みの建物である旨の標示などを定めた「統一的な活動標示方式」が政府の中央防災会議で関係機関に示されたことは評価されるべき点だと考えている。

また、緊急消防援助隊として応援に出る訓練のみでなく、応援を受ける側の訓練も消防本部単独や市、県のレベルで実施されるようになり、応援を受ける側の事前準備及び訓練の大切さを非常に感じている。今後もこれらの訓練を継続して行っていきたい。

これから

近年では国境を越えた人的・物的の救助・救援活動が盛んになっていることから、援助する側・受ける側両方の視点で今後積極的に取り組んでいきたい。

同時に基本に立ち返り、自分自身が活動に専念できるようにするための日頃の準備の大切さを再認識している。自分の子供が他県で一人暮らしをするようになったこともあり、離れて暮らす家族宅の家具固定や、いざという時に安否確認が取れるよう、事前にできることを今一度しっかり行いたい。

市民病院職員 A

震災直後の記憶

わたくしは地震を体感できませんでした。当日は夕方から講演会を計画しており、幸い講師の先生は県内の人だったので、交通も問題がなくそのまま実行しました。

講演会が終わってから、震災の状況がわかってきて、DMAT として出動の準備をすることになりました。その時はわたくしは病院に残る後方支援を担当しました。

この10年間の記憶

DMAT が実際に活動できることを実感したし、期待も大きいことを感じている。そのための定期的な訓練も継続が大切と思う。

また自助活動が重要であることが周知の常識となりつつあり、DMAT や災害対策委員のみならず、すべての医療職員が災害に立ち向かう一人一人であるとの認識は高まっていると思う。

これから

一人の医師としてできる活動を地道に行いたい。Covid19 に対しても決して逃げることなく正面から診療にかかわりたいと思っている。

また東京オリンピックなどの催事医療にも協力したいと考えているので地元のマラソン大会や祭り事、医療などにも参加し学びたいと思うし、参加してくれる職員が増えるように方向付けができるとよいと考えている。

わたくしは DMAT を卒業する日が近いので補充の職員を育てる病院としての覚悟（方針）が欲しい。

コラム「DMAT」

「災害急性期に活動できる機動性を持った、トレーニングを受けた医療チーム」と定義されており、災害派遣医療チーム Disaster Medical Assistance Team DMAT（ディーマット）と呼ばれている。

医師・看護師・業務調整員（医師・看護師以外の医療職及び事務職員）で構成され、大規模災害や多傷病者が発生した事故などの現場に、急性期（おおむね48～74時間以内）に活動できる機動性を持った、専門的な訓練を受けた医療チームである。

市民病院職員 B

震災直後の記憶

名古屋市内で県主催の救急医療関係の会合に参加していた。軽い揺れを感じたのみであったが、携帯電話等で東北地方の巨大地震と判明し、会議は中断となり帰院した。DMAT 隊員を招集し、病院長と連絡を取りながら出動準備をした。自宅に戻り装備を整え、他の隊員と食料の調達に出かけた。出動決定までには時間を要したが、発災当日の夜遅くには医師2名、看護師2名、ME 1名にドクターカーとワゴン車の2台で出動できた。翌日、新潟経由で福島空港に入り、他の DMAT と協力して3名の傷病者を羽田空港に搬送した。DMAT が多数集まっており、当院 DMAT は後方支援役で航空機に搭乗する機会はなかった。追加の傷病者はなく、翌々日の夜遅くには帰院し、月曜日からは通常勤務に戻った。

この10年間の記憶

震災では DMAT の必要性を実感した。院内の DMAT 3チーム体制を維持したいが、職員の異動や高齢化で隊員の確保が困難となってきている。コロナ禍で隊員養成研修自体が開催されないことも影響が大きい。また、院内に DMAT が発足して10年以上が経過しており、装備の更新も行って行かなければならない。災害は地震だけでなく、風水害は毎年のようにどこかで発生しており当地も例外ではない。また、コロナ禍も災害ととらえることができ、DMAT のみで災害対応できるものでもない。

日常の医療とかけ離れたことを非常時に行うことは困難であり、日常医療の延長線上に災害医療があり、誰もが取り組んでいかなければ乗り越えられないことを認識しなければならない。

これから

当院は西三河南部東医療圏で唯一の災害拠点病院であり、周辺地域からの傷病者の流入も考えられるため、大規模災害時の負荷に耐えられるか危惧される状況にあった。近年、大学関連病院が2施設進出してくることとなり、医療圏の災害医療体制を拡充するには絶好のチャンスが訪れたととらえたい。医師会、保健所、歯科医師会、看護協会、薬剤師会等と協力して、未来に備えた体制作りが出来たらと思う。私自身の課題は後進にうまくバトンを渡していくことであると感じている。

保健部職員 A

震災直後の記憶

東日本大震災の当日は、年度末ということもあり、次年度に向けて打ち合わせを行っていました。

地震の揺れを感じた時には窓口対応をしており、ゆらゆらとした長い揺れを感じ、船酔いしたような気持ち悪さを感じました。その後、他の職員から親族のいる東北が大変なことに…等々の情報が入ってきて、地震と津波により東日本に甚大な被害をもたらされたことを知りました。

私たち保健師は、愛知県を通じて厚生労働省から保健活動チームの派遣依頼があり、即座に人員の調整に入ったこと、原発の影響もあり愛知県チームの第1陣は派遣先も確定しないまま、東北を目指して出発したことなどを記憶しています。

この10年間の記憶

震災後から各小学校区に2人ずつ配置されている健康推進員には、災害時の避難所での活動協力などを積極的にお願いしていきようになりました。毎年、地域総合防災訓練では、健康推進員とともに保健師が訓練に参加し、保健所との情報伝達訓練を実施するなどの取組を行うようになっていきます。

東日本大震災以降も大きな災害の際には、国、愛知県を通じた保健活動チームの派遣要請があります。現在は、愛知県、中核市、一般市で保健活動チームを編成し、派遣する体制となっているため、大きな災害が起こると派遣のことが一番に頭に浮かびます。

これから

自分自身が震災の支援に出向く際には、当然のことですが「支援に行く」という使命感を持って活動をしてきました。支援を通して感じたことは、自分たちの地域が被災したときの心構え、準備をいかにしておくのか、受援体制はできているのかということです。平常時からの準備は大切と言いながら、どうしても優先順位が下がりがちです。このお話をいただいたことをきっかけに取組を前に進ませたいと思います。

震災直後の記憶

東日本大震災の前後で、地震に対する防災意識は大きく変わりました。東日本大震災では、宮城県に住む親しい友人が被災しました。私も被災地支援で岩手県に滞在していた最中に震度6の余震を体験しました。その余震は深夜に発生し、ただひたすらに寝袋の中で早く収まるのを祈り続けることしかできませんでした。その経験から大地震というものを身近に感じるようになりました。

この10年間の記憶

地震発生時に被害を最小限にするにはどうしたらいいか。援助が来るまでの間どのように耐え忍べばいいか。避難が長引いた時にはどのように生活できるのか。そのようなことを考えるようになりました。被害を抑え、援助が来るまでの間を耐え忍ぶのは当然のことですが、一番の心配は長引いた時の避難生活のことでした。10年前は、私と妻、1歳の息子の3人家族でした。小さい子を抱えての避難生活は、周囲への影響も考えると精神を擦り減らすものであると思っていました。その後、2人の子に恵まれ5人家族となりペットも飼い始め、その思いはより強くなりました。

幼くてやんちゃな子どもたちが周囲に迷惑をかけないだろうか。ペットと一緒に避難はできるだろうか。被災地支援中に訪問した避難所でもプライバシーの確保やペットとの同行避難については問題となっており、“衣食”は援助等で何とかなるが、スペースの限られた避難所での“住”が一番の課題だと思いました。それを少しでも解消させたくて、災害時に家族5人とペットが過ごせるようにキャンピングカーを購入しました。布団と最小限の食べ物と飲料水を常に載せてあります。ソーラーパネルと充電機も積んでおり、悪天候が続かなければ電気も心配ありません。数日であればトイレも利用できます。普段は趣味に使用し、災害時には家族のシェルターにもなり、最大の災害対策だと感じています。災害で車が壊れなければですが...

これから

今の一番の心配事は昼間に被災した場合、親が不在でも子どもが自身で安全を確保して避難し、家族が無事に落ち合えるのかということです。子どもたちは小学生と保育園児でスマホ等も持たせていません。下の二人は親が勤務の時は保育園と児童育成センターに預けているので大丈夫だと思いますが、長男は下校後一人で家にいるため、そのような時に被災することが一番心配です。被災した時にはどのように行動するのか、どこに避難して、どこで家族が集まるのか。スマホを持たせた方がいいのか。子どもたちも成長してきたので、これからは子どもと一緒に防災について考えていきたいと思っています。

ボランティア担当職員

震災直後の記憶

震災直後は「〇〇（地名）に20人避難してきた」などの情報が錯綜していた。その時は避難者を受け入れるという事務分掌はなく、どの部署が対応するのかの駆け引きが始まっていた。「どこもやらないなら福祉部でやれ！」当時の福祉部長の英断である。初動が早かったため、国や県よりも早く岡崎市独自の受入被災者登録制度を構築し、ピーク時には80人を超える避難者の支援にあたった。

次に出てきたのは「寄付をしたい」「ボランティアに行きたい」という市民からの問い合わせである。寄付については、日赤や共同募金のほかに市独自に義援金の募集を行い、市民から2億円を超える浄財が集まり、岡崎市災害義援金配分委員会において決定した分配方法により被災した7県に支援金として届けた。

ボランティアについては、現地が混乱していることもあり、ほとんどの自治体が県内在住に限定している状況であった。市民のボランティア熱に何とか応えたい、さりとて被災地の邪魔になるようなことはしたくないというジレンマの中、平成20年8月末豪雨の際に本市を支援してくれたNPO法人のレスキューストックヤードが活動拠点としている宮城県七ヶ浜町が受入を承諾してくれたこと、市内の某観光会社がバスを提供してくれたこともあり、社会福祉協議会とともに準備を進め、2011年5月9日、応募のあった市民19人が第1次派遣としてボランティアに向かった。

ボランティア活動中に迎えた発災からちょうど2か月目にあたる5月11日午後2時46分、被災地の人たちと一緒に瓦礫の山の中で黙とうを捧げたことを今でも覚えている。以後、行先は岩手県大船渡市になったが10月の第6次派遣まで毎月市民ボランティアの派遣を行い、延べ114人の市民が活動を行った。

この10年間の記憶

・被災者支援の一環で、市内の主婦らと一緒に手弁当で数回交流会を開催した。参加者は岡崎に知り合いもなく、久しぶりの同郷の人との会話に盛り上がった。中には交流会以後も個別に連絡を取り合うグループもできたと聞いている。

・市民活動団体が実施している支援活動を協働して行ったり、後方支援をしてきた。特に活動が盛んな福島県の子どもたちを支援する保養プロジェクトについては、春休みには中学生のバスケットボール交流試合(昨年度はコロナのため中止)や、夏休みにはバレーや剣道のスポーツ交流、岡崎を中心に行うキャンプなど現在でも続いている活動がある。

これから

・出前講座などで避難者に実体験を話してもらったことがあったが、リアリティがある分説得力があった。この経験を岡崎市民にフィードバックしてもらおう仕掛けがあってもいいと思う。

・交流事業には業務として参画していたが、担当が代わった現在は個人としてやれる範囲で協力しており、今後も続けていきたいと思っている。



写真：蓬莱島

岩手県大槌町にある、人形劇

「ひょっこりひょうたん島」のモデルとされる島

東日本大震災で、津波の被害を受けたが、

地元有志などにより、灯台を復旧

発行：岡崎市防災課

令和3年3月11日